

幸手市文化遺産だより



幸手市郷土資料館
VOL.19

● 幸手歴史物語 幕末編 彰義隊士 横山光造と渋沢栄一

幸手市郷土資料館 企画展

彰義隊士 横山光造の陣笠

令和3年 5月25日(火) ~ 7月18日(日) 9:00~17:00

〒340-0125 埼玉県幸手市下字和田58-4
☎ 0480-47-2521
※休館日 月曜日

幸手市郷土資料館 令和3年度 企画展

渋沢栄一と幸手

7.22 THU 9.5 SUN

〒340-0125 埼玉県幸手市大字下字和田58-4 ☎ 0480-47-2521
※休館日 月曜日(8月9日を除く) 月曜日と8月10日(A)

企画展ポスターの表紙

令和3年度、幸手市郷土資料館では、江戸時代の幕末に関する二つの企画展を開催しました。とはいえ、開催期間中は、新型コロナウイルスの感染拡大防止という課題と、いつも隣り合わせにある状況が続きました。このため、外出を自粛され、見学をあきらめた方もいらっしゃると思います。

そこで、今回は、まず「彰義隊士 横山光造の陣笠」、そして「渋沢栄一と幸手」という二つの企画展の概要をご紹介します。

江戸幕府の治世が終わり、戊辰戦争をへて「明治」という新しい時代の幕が開く…「幕末」はまさに日本史の中でも激動の時代といえます。

時代のうねりの中で幸手の先人たちは、どのようにこの時代の荒波を乗り越えたのでしょうか。

令和3年度企画展 『幸手市郷土資料館 雛まつり』

幸手市郷土資料館

令和4年2月1日(火)～3月31日(木)まで
3月3日は、五節供のひとつ「上巳(じょうし)」の節供です。古く中国でみそぎをしてよくないことを払う行事が行われていたのにならい、日本でも平安時代、朝廷や貴族の行事として行われるようになったのが「上巳の祓(はらえ)」です。

江戸時代になると、上巳の節供に女の子のいる家で雛人形やその調度類を飾り、白酒、菱餅、桃の花などを供えてまつる雛祭りとして行われるようになり、今日に至ります。

幸手市郷土資料館では、平成30年の開館以来、雛祭りの時期に合わせて、豪華な御殿飾りと雛道具を展示しています。職人の技を尽くした御殿の迫力と精緻な技巧を凝らした道具類は大変好評です。

今年度はこのほかに、昭和50年代に幸手町が収集した雛人形をはじめ、郷土資料館の開館以降に収集したものまで、約40年にわたる収集事業の成果の一端を披露しています。



アクセスマップ



幸手市郷土資料館 利用案内

- 開館時間 午前9時から午後5時まで
- 入館料 無料
- 休館日 月曜日(祝日の場合はその翌日)、年末年始

新型コロナウイルスの感染状況により、郷土資料館の利用案内を変更する場合があります。ご来館の前には、お電話やホームページで開館状況などをご確認ください。



幸手市文化遺産だより 第19号 令和4年3月1日発行

編集：幸手市郷土資料館

〒340-0125 幸手市下字和田58-4 TEL 0480-47-2521

発行：幸手市教育委員会

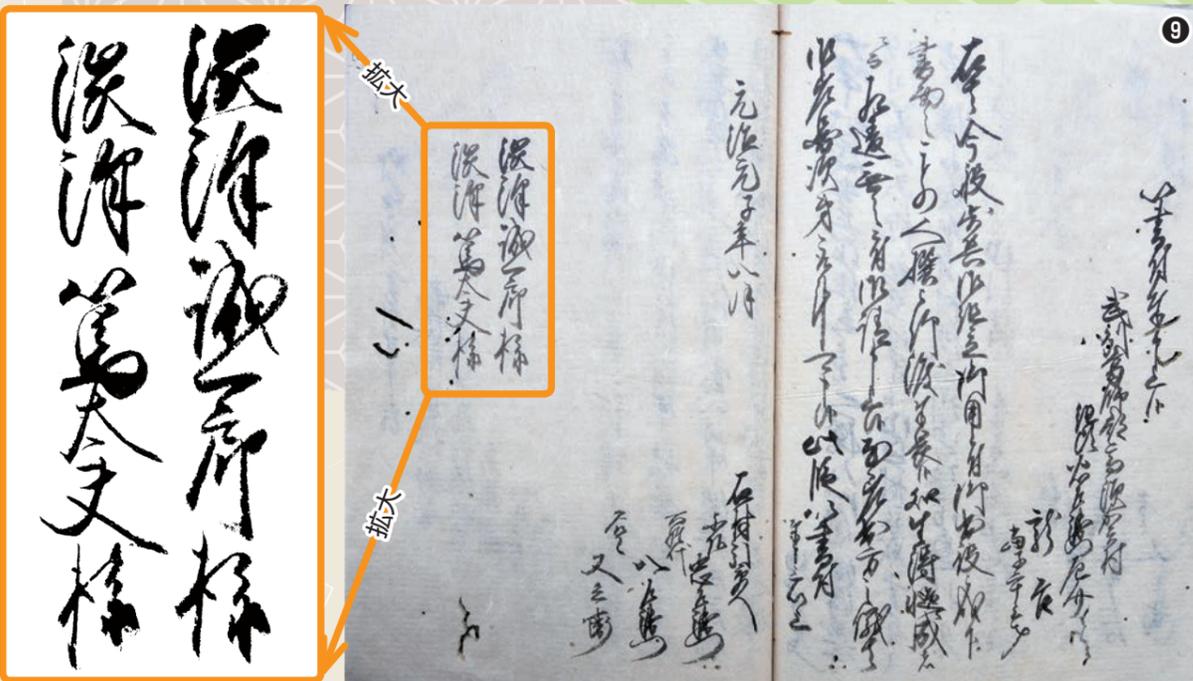


幸手市郷土資料館
ホームページQRコード

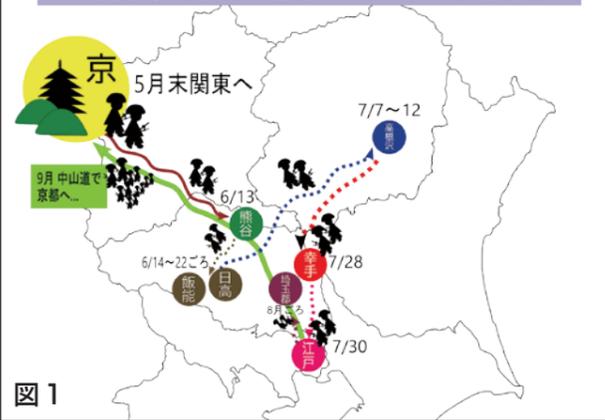


①この陣笠は、横山光造が使用したものと伝えられる。鍔が反り返っている形から「端反笠」と呼ばれる。表面は、黒色の漆が塗られ、鍔の裏側は朱塗りで鉄の輪を鍔で止める。正面には笹の葉を圖案化した「丸に九枚笹」の家紋がある。②横山光造の肖像画。③企画展の開催状況。④元治元年(1864)柳剛流剣術切紙(部分)(久喜市公文書館所蔵 小林範夫家文書)元治元年に上原勘五郎から小林新左衛門に与えられた切紙。上原勘五郎の師匠は横山光造。さらに光造は、柳剛流祖の岡田惣右衛門(奇良)に教えを受けた松田源吾(義教)に師事していたことになり、光造は松田源吾派の剣士ということになる(注「幸手剣術古武道史」)。⑤永島芳虎画「東台大戦争図」明治7年(1874)(国立国会図書館ウェブサイトから転載 ⑥も同じ)彰義隊と新政府軍とが戦った上野戦争を描いた錦絵。横山光造は、上野戦争で黒門に配置された。黒門付近では、西郷吉之助(隆盛)の率いる薩摩軍と彰義隊との激しい戦いが描かれている。⑦箱館戦争は、榎本武揚の率いる旧幕府兵を中心とした勢力と新政府軍とが蝦夷地(北海道)の箱館(北海道函館市)周辺で戦った戊辰戦争最後の戦争。⑧榎本軍の拠点、有名な五稜郭(函館市公式観光情報「はこぶら」ホームページより)。なお、山崎有信「彰義隊戦史」には、「函館に赴きたる彰義隊の第一列士満第二大隊に属するもの百八十余」とし、「差図役並」に「加藤光造」の名前がみえる。⑨消滅する戸島村の沿革を後世に伝えるため、明治22年(1889)5月に建てられた「戸島郵便合記」。篆額は榎本武揚。碑陰には横山光造も名を連ね、箱館戦争で共に戦った両者の名が描う。

横山光造は、柳剛流の剣士です。江戸時代の終わりに安戸村二本木(現 杉戸町本島)に生まれますが、慶応4年(1868)5月に起こった上野戦争で、「加藤光造」と名乗り彰義隊の11番隊組頭として新政府軍と戦い、さらに箱館戦争にも参加しました。その後、戸島の地で剣術を教え、生涯を閉じます。
令和2年11月、ご子孫から横山光造が愛用したと伝えられる「陣笠」が市に寄贈されたことから、展示を企画し公開しました。



元治元年 渋沢成一郎(喜作)と渋沢篤太夫(栄一)の一橋家 歩兵組立人選御用の廻村ルート想定図



⑨当館蔵 鈴木家文書「文久元年(1861) 諸願書并質物証文之扣」には、渋沢成一郎と渋沢篤太夫が歩兵組立人選御用で高須賀村に訪れたことがわかる資料が3点記録されている。



幕末の元治元年(1864)、渋沢栄一は幸手の村々を訪れています。その理由は、栄一が仕官した一橋慶喜の動きと深くかかわります。
文久2年(1862)に一橋慶喜は、江戸幕府第14代将軍の徳川家茂の將軍後見職となります。次いで、元治元年3月に家茂とともに京都へ行った慶喜は、朝廷から京都御所を守る「禁裏守衛総督」を命じられます。
ところが当時、一橋家は、慶喜を護衛する兵しかなく、ほとんど軍事力を持っていませんでした。そこで仕官して間もない栄一は、「このままでは御所を守れないので自分に歩兵の募集を命じてほしい」と願い出ます。この意見が認められ、元治元年5月末に京都を出発、従兄の渋沢喜作とともに関東の一橋家領の村々をめぐるようになったのです(図1参照)。
幸手市域では、江戸時代に5つの村が一橋家領でした(図2参照)。このうち、高須賀村(現在は大字惣新田の一部)の元治元年8月の古文書には「渋沢成一郎(喜作)様・同篤太夫(栄一)様」が「歩兵を組み立てるための人選御用で私たちの村に廻村された」と書かれ、惣新田村の龍吉(間中龍吉)という23歳の青年が選ばれています。
このように、地域に残された古文書から、当時24歳の青年 渋沢栄一が幸手に来たことがわかるのです。